

目次	1	第10回PoPセミナー「グリーン・イノベーションの現在—今、どこで、誰が、何を—」 [田幡琢磨]
	2	研究室の窓から [田中伸男] / 第73回 公共政策セミナー
	3	留学生インタビュー [Haemin Choiさん + Kkogsongi Parkさん + Jinsun Limさん]
	4	FED体験談 [黒飛建二] / トピックス

第10回 PoPセミナー 「グリーン・イノベーションの現在—今、どこで、誰が、何を—」

田幡琢磨 公共管理コース1年

2013年7月18日に、経済産業省、国土交通省、環境省の若手官僚をお招きし、第10回 Policy Platform Seminar (PoPセミナー)、「グリーン・イノベーションの現在—今、どこで、誰が、何を—」がSTIG(科学技術イノベーション政策における「政策の科学」教育研究ユニット)主催で行われました。

STIGは「大学院レベルにおける文科系あるいは理科系の専門的教育を基盤として(中略)科学技術ガバナンスの担い手となる人材を育成する」プログラム*です。PoPセミナーは、STIGの取り組みのうち、産官学をつなぐプラットフォーム構築を目的として開催されているものです。学内外の人間が共通のテーマを通じて理解と連携を形成すると同時に、学内において理系学生と文系学生が話し合い、考え方を共有する機会でもあります。現に私は、PoPセミナーに参加するたびに話し合う理系の友人ができました。

今回のPoPセミナーでは、「グリーン・イノベーション」というテーマで3省庁の方からお話を頂きました。環境省の吉田諭史さん(地球環境局 地球温暖化対策課 課長補佐)からは2030年、2050年の世界と日本の情勢予測をもとにした大きな物語で見た場合の現在のグリーン・イノベーションの位置づけと価値について、経済産業省の河野孝史さん(産業技術環境局 地球環境対策室 課長補佐)からは、過去から現在までの温暖化対策に関する国際交渉と今後の動向について、国土交通省の嶋川智尉さん(総合政策局 環境政策課 課長補佐)からは社会インフラに関する環境・エネルギー政策において現在の日本にどのような施策があるのかについて、それぞれお話をいただきました。講演者個人による部分も大きいのですが、それぞれの話し方の違いから、省庁ごとの問題の切り口の違いが見えたのでは、と考えています。

GraSPPが中心となり、PoPセミナーなどが開催されることの意味は、まさしくプラットフォームの形成にあるのではないのでしょうか。今年度、私が入学する際に「GraSPPの特徴は多様性であり、この多様性が武器になる」という内容のスピーチを頂いたのを覚えています。今回のセミナーでは「グリーン・イノベーション」という

テーマで、GraSPP内外から人が集まり、人とのつながりができました。これは理想的な面だけでなく、「このテーマであればこの人にならばよい」という実際のな面を強く含みます。この記事では詳しい講演内容には取って触れませんでした。それは本セミナーに実際に参加した人の特権です。悔しい。もっと知りたい。そういった方は次の機会にぜひお越しください。ご自身のお話をお聞かせください。私たちともお話ししましょう。そして政策のプラットフォームを(あわよくば私個人にとっての人脈を)一緒に形成していきましょう。

*STIGホームページ「STIGについて」より
<http://stig.pp.u-tokyo.ac.jp/about.html>



研

研究室の窓から

第 8 回

アジアからの留学生



教授

田中 伸男

前・国際エネルギー機関 (IEA)
事務局長

4月から東京大学公共政策大学院で教鞭をとっている。エネルギー安全保障を英語で教えているが、24人のクラスに日本の学生は3人だけだ。日本人にとって言葉のハンディはいまだ大きいようだ。

ところが中国や韓国などからの留学生には、日本語が堪能な人がいる。その他の国籍でも日本で仕事をしたいと考える若者は日本語がうまい。日系3世の米国からの留学生は「やっと祖国に帰った気がする」と言った。東大と中国・北京大、韓国・ソウル大が、お互いに英語による専門科目を提供しあい、相互留学を可能にするCAMPUS Asiaプログラムには、英語に加えて日中韓3カ国語を楽々とこなす中韓の若者がたくさんいて驚いた。

日本の奨学金で語学教育を受けた後にこの大学院に来た中国人の女性は、日本への感謝を熱く語った。彼、彼女ら日本への思いの強さは、最近の領土問題や複雑な外交関係などこ吹く風の体である。日本企業でのインターン制度にも多数の留学生が応募しているが、皆が熱意に燃えた学生たちだ。彼らの多くが日本企業での就職を希望しており、日本の学生にとっては手ごわい競争相手だろう。

国際機関で働きたいという者も多かった。私の経験によれば、そのためには政府からの出向でない限り、特定分野での博士号と職務経験が必要不可欠である。日本人学生の中にも国際機関を目指す者がいるが、狭き門だ。日本にはこのようなキャリアを育てる専門の大学院がないからだ。

公共政策大学院は、日本のリーディング大学院としてこの道を切り開こうとしている。「若者よ頑張れ」というだけでは人は育たない。革新的インフラ作りが必要だ。

日中韓の未来はこれらの若者が創る。

※毎日新聞に掲載された2013年5月30日付「経済観測」に加筆修正した

第73回 公共政策セミナー

2013年5月22日、蒲島郁夫熊本県知事を講師にお迎えし『行政の新フロンティア～くまモンの政治経済学～』というタイトルで、第73回公共政策セミナーが小柴ホールで開催されました。蒲島知事は、東京大学教授から知事に転身して現在2期目を務めていらっしゃいます。東京大学教授になる前は、高校を卒業して地元の農協に就職、その後農業研修生として渡米、ネブラスカ大学を卒業してハーバード大学大学院に進学・博士号取得等、異色の経歴の持ち主です。

熊本県政ならぬ「蒲島県政」では、指導や規制、管理に重きをおいた従来型の行政から大きく転換し、「県民の幸福量の最大化」を目指しています。この県民の幸福量の最大化には、経済的豊かさ(Economy)、品格と誇り(Pride)、安心安全(Security)、夢(Hope)という四つの要因があります。政策がこれらの要因にどのように影響し、幸福量の増大に寄与するかは、目標(県民幸福量の最大化)を全微分して分析することができます。たとえば、今やすっかり有名になったくまモンもその政策の一つです。くまモンという政策は上記四つの要因すべてに良い影響を与えています。そして存在そのものが県民を幸福にしています。

当日は、蒲島知事の講演後にくまモンがサプライズで登場、くまモン体操を披露しました。セミナー終了後は聴衆一人ひとりにくまモン名刺と蒲島知事の講演録を手渡しし、写真撮影にも気さくに応じていました。くまモンという政策が大成功を収めた理由がよくわかる光景でした。

(文責 編集担当)



留學生

インタビュー

第4回

— Campus Asia プログラムを選んだ理由を教えてください。

Haemin (以下H): 中学はニュージーランド、高校と大学はアメリカでした。ソウル大学校で必要な単位を全部取得し、あとは卒業式を待つばかりというときに、CAMPUS Asiaのニュースが飛び込んできました。いつか日本と中国で暮らしてみたいと思っていたので、この機会を逃す手はない!と、指導教官に直訴し、ソウル大学校での卒業を延ばしてもらい、応募しました。周りからは驚かれましたが、卒業延期を認め、CAMPUS Asiaに応募することを認めて下さった教授には、深く感謝しています。

ソウル大学校、北京大学で修了要件を満たし、GraSPPが最後です。社会にデビューするのに勇気が要りそうなので、もうちょっと学生をやっていたいなと思います(笑)。

Kkogsongi (以下K): 小学校から高校2年(1996年~2004年)まで、家族で日本に滞在していました。その時はインターナショナル・スクールに通っていたので、純粋な意味での日本の学校に行くことがなく、本当の日本を知る機会がなかったのでは、と残念に思いながら韓国に帰国したので、大学院のCAMPUS Asiaプログラムがその機会を開いてくれたと感謝しています。このプログラムでは韓国、中国、日本の3ヶ国で勉強するのですが、直接その国に訪れ「これが東アジアか」と感じたかったという理由もあって、迷わず応募しました。国際関係には常に葛藤や誤解が生じますが、このプログラムを通じて、東アジアの和解と協力を手助けできる人になりたいと思います。

Jinsun (以下J): わたしはみんなと違い、大学に入るまで韓国を出たことがありませんでした。

大学の専攻は外交学科でした。中学生のときから外交官になりたいと思っていました。大学3年次に海外の提携校への交換留学の募集がありました。第1、第2希望はスペインの大学でしたが残念ながら希望が通らず、第3希望の大阪大学に1年間留学しました。そのうち、外交官としてではなく国際機関で働きたいと思うようになりました。国際機関に就職するには修士号が必須であること、実際に東アジアの国に身を置いてアジアの地域協力について考えたこと、CAMPUS Asiaプログラムに応募しました。

東京と比べて、大阪は「ザ・日本」という部分が色濃く残っています。大阪大学には日本を一度も出たことがない「純日本人」がものすごく多かったです。大阪滞在中は差別も受けましたが、「韓流が好き」と言ってくれる人もいたし、仲良くなった友達もいて、日本に愛憎相半ばする思いを抱いていました。しかし、その3年半後、日本が震災や経済で大変な目に遭ったときには、「日本には再び成功してほしい」と強く思いました。



Haemin Choiさん
Kkogsongi Parkさん
Jinsun Limさん

韓国出身
キャンパスアジアコース在籍中

左から
Haeminさん、Kkogsongiさん、Jinsunさん

K: 国際関係は主に政治家やマスメディアによって左右されますが、対象国に知り合いがいると、問題について率直な考えが直接いろいろ聞けるので、誤解を減らすことができます。国際関係も結局は人間関係と本質は変わらないと思うので、人々がもっと物事について勉強し、話し合う「国際コミュニケーション」が重要だと思います。

H: わたしは今までいろいろな国で暮らしてきて、差別などを経験したこともありました。実は差別はどの国でもあるもので、日本に来るまでは、日本人も韓国人を差別するのではないかと思っていました。しかし実際にはそんなことはあまりなく、わたし自身が差別に遭ったこともありません。Kkogsongiさん、Jinsunさん、ソウルから一緒に来た仲間、GraSPPの日本人の友達に支えてもらっていることもあり、日本ではいい思い出ばかりです。今は留学期間が終わって、韓国に帰るのが嫌です!(笑)

J: とは言っても、わたしたちが付きあっているGraSPPの生徒は国際的でオープンマインドの持ち主なので、日本人にしては珍しいタイプだと思います。わたしたちも、留学経験があり、授業がほぼ全部英語で行われるソウル大学校から来たので、典型的な韓国人とは言えません。このような学生が集まっているCAMPUS Asiaの学生は、相手を理解しようという気持ちがあります。だからわたしはCAMPUS Asiaプログラムは成功すると思います。

— 日本語の授業も取っているんですね。

H: 日本語は聞くのは大丈夫なんですけど、緊張するとしゃべるのはつい英語になってしまいます。もらった資料や課題図書は英語なので、頭の中で英語から日本語に翻訳しなければならないのが大変です。いっそ課題図書や資料が日本語のほうが楽だったかも、と思います。

K: 日本語の授業を今学期は4つ取っていましたが、一番印象に残るのは『政治とマスメディア』(谷口将紀教授)という科目です。人数は10人ほどでしたが、討論好きな仲間とカリスマ的な教授とで、良い緊張感でいつもハラハラ。『アメリカ政治外交史』(久保文明教授)はHaeminさんと一緒に取ったのですが、シャイなクラスメートが特に多かったと思いますね。

H: Hi! って挨拶したら「済みません」って謝られて驚きました(苦笑)。

(インタビュー・文責 編集担当)

FED体験談

黒飛建二 法政策コース2年

FED (Forum for English Discussions) は日本人学生と留学生 (GraSPPだけでなく他学部・他研究科の留学生も含む) が英語で交流する機会を提供するグループです。目的は、第一に国際的なコミュニケーションの機会を提供すること、第二に留学経験はないが海外に興味のある日本人学生に対し、英語で話す抵抗をなくし、GraSPPの英語の授業に積極的に参加してもらうことです。

私は留学経験がなく、日本語の授業ばかり取るような平均的學生でした。しかし、当時一人でFEDの代表をしていたロシア出身の學生に誘われて、昨年度の冬学期から運営側として深く関わることになりました。その結果、多くの留学生と仲良くなり、英語にも自信がついて、満足しています。

FEDの中心となる活動は、夏学期と冬学期のあいだ、週に一度、昼食時に1時間ほど行うディスカッションです。毎回、學生の1人が提案したテーマを参加者で討論します。今学期は平均で留学生12人、日本人學生5人が参加しました。

FEDに参加している留学生の出身国・地域は、アメリカ、中国、デンマーク、ガーナ、エチオピア、ベトナム、インドネシア、フィリピン、ロシア、シンガポールと多岐にわたっています。彼らは、自分が生まれ育った国・地域の政治、経済、社会、文化、宗教、慣習について、誰よりも詳しい知識を有しています。また、MPP/IPの學生は公的機関で働いた経験がある人が多く、実際の公共政策の考え方と価値観を持っています。

FEDは、日本人學生が英語の授業に必要なディスカッション能力とプレゼンテーション能力を高める機会も提供しています。留学生との白熱したディスカッションで自分の主張を説明し、日本特有の政策については外国人にその内容や意義を説明します。セッションの最後には、1時間何を話したのかを留学生の前で発表することも試してみました。英語の授業や国際会議などでディスカッションやプレゼンテーションを行う練習になります。

ディスカッション以外にも、文化交流企画や留学生への関心を高める試みを続けてきました。最近では、6月中旬に浴衣イベントを開催しました。本郷地区の住民の方のご厚意で學生が浴衣の着方を教わり、浴衣姿で大学構内を散策しました。留学生は日本の伝統衣装を着ることができて、とても喜んでいました。

来学期は、GPPN Student Conference (世界の公共政策大学院7校のネットワークGlobal Public Policy Networkが學生主体で毎年開催する会議) のホストにGraSPPが選ばれています。他大学の學生を迎えるには、日本人學生と留学生のさらなる協力が不可欠です。FEDがその橋渡しとして協力できるよう、留学先のソウル大学から祈っています。



FED活動の一コマ



6月の浴衣イベントで、赤門前にて



TOPICS トピックス

● 2011年度法政策コース修了生の桑原悠さん(現・新潟県津南町議会議員)から、カサブランカをたくさん頂きました。カサブランカの生育に適した土壌、そして栽培者の方々の不断の努力などさまざまな要素があいまって、津南のカサブランカ「雪美人」は高い評価を受けるに至っています。

● 最初、つぼみのまま枯れたらどうしようと心配しましたが、それも杞憂に終わり、院長室で次々と大輪の花を咲かせて、教職員の目を楽しませてくれました。桑原さん、ありがとうございました。(編集担当)



CAMPUS Asia 1期生となる韓国の女子學生3人から、インタビュー中、嬉しい言葉をたくさんもらいました。「日本と韓国はいろいろ問題もあるけれど、日本で生活して友達ができると、(震災や不景気など)大変な時期を頑張って乗り越えて、再び成功してほしい」「日本と何かあっても、そこに友達がいると、ある程度感情に歯止めがかかり、物事を違う角度から眺められる」「日本ではいい思い出ばかり」……彼女たちがオープンな姿勢だったことも大きいでしょうが、日本の良き理解者になってくれたのは実にありがたいことです。理解者をつくる土台づくりのお手伝いを地道に続けたいと思っています。(編集担当)

NEWSLETTER [編集・発行] …… 東京大学公共政策大学院
第33号
GRADUATE SCHOOL OF PUBLIC POLICY
THE UNIVERSITY OF TOKYO

[発行日] …… 2013年8月2日

[デザイン] …… 安孫子正浩(水蒸気図案室)

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 tel 03-5841-1710 fax 03-5841-7877
E-mail grasppnl@pp.u-tokyo.ac.jp <http://www.pp.u-tokyo.ac.jp>